

東北地方の民話・昔話・伝説に見られた 病氣治療例の収集と分析 —第一報：青森県，岩手県，秋田県—^{*1}

医療法人社団歯周会西堀歯科・豊田歯科 鈴木長明^{*2}

要旨：青森県，岩手県，秋田県の民話，昔話，伝説を資料として，病氣治療例を収集し分析した。収集できた症例は54例であった。病人あるいは悩める人は59例で，そのうち一般人は29例であった。症状あるいは悩みは57例であった。効果がなかった治療歴では医者14例，宗教等関連者が16例であった。治療担当者あるいは相談者では宗教等関連者が17例，本人を含む一般人が35例であった。診断法あるいは本人の願い成就法は占い，祈願，八卦，その他であった。病因あるいは病名は祟りあるいは邪気が最も多く，医学的には蛇による咬傷，恋わずらい，その他であった。治療法では娘による介抱，湧き水を飲む，温泉などの医学的療法，呪文，祟りを除くなどの宗教的療法であった。治療効果は成功例が44例，死亡例が1例であった。治療効果には心理的要因が大きく関与しておりそれは現代医学の心理療法の原点になっているのではないかと考えられる。

キーワード：東北地方，民話，昔話，伝説，病氣治療例

Abstract： Fifty four cases of disease treatment described in the folklore, old tale and legend of the Tohoku region were collected and analyzed. The number of sick or people with trouble was 59. Among them the number of ordinary person was 29. Fifty seven kinds of symptoms or troubles were revealed. Treatments by the previous doctors and religious people without effect were found in 30 cases. Caregivers or consulters were only one doctor, 17 religious people, and 35 ordinary people including sick themselves. Diagnostics or wish fulfillment methods were based on fortune-telling, prayer, eight divination signs, and others. The etiology or disease name were curse, evil spirits, snake bite, disease caused by love, and others. Treatment was variable. The care by young woman, drinking spring water, spa treatment, and others were included in medical treatment. Casting the spell, excepting for the curse, and others were included in the religious treatment. In the therapeutic effect successful cases were 44 cases and deaths was 1 case. It was suggested that psychological factors were involved in large therapeutic effect, and this had become the origin of the psychotherapy in modern medicine.

Key words： Tohoku Region, Folklore, Old Tale, Legend, Medical Cases

はじめに

医療は古代から現代に至るまで時代とともに発展し，現在ではいろいろ問題点は残されているが，現代医療の恩恵に与えるようになった^{1,2)}。しかしながら，日本においても50年前には全国に無医村あるいは無歯科医村が数多く存在した。

^{*1} Collection and Analysis of Medical Cases Described in the Folklore, Old Tale and Legend of the Tohoku Region—Part 1: Aomori, Iwate and Akita Prefectures

^{*2} Nagaaki Suzuki, Nishibori Dental Office and Toyoda Dental Office

ところで、現代のような進歩した医療技術が存在せず、医療担当者の数も少なく、健康保険制度も確立していなかった時代において、人々が病気の際どのように対処してきたかに関する具体例については明らかではない。

そこで人々の生活が記録されてきた民話・昔話・伝説を調査資料として用い、具体的症例を収集し分析することを試みたので報告する。

方 法

今回は資料として北東北地方の青森県、岩手県、秋田県における民話、昔話、伝説について記述された以下の書籍を用いた。

民話では、未来社発行の「日本の民話 1, 2, 4, 別巻」、きょうせい発行の「新装日本の民話 東北(一)、(二)」、研秀出版発行の「日本の民話第2巻・東北Ⅰ」を用いた。

昔話では、岩崎美術社発行の全国昔話資料集成の「津軽昔話集」、「下北半島昔話集」、「角館昔話集」、「阿仁昔話集」、三省堂発行の日本昔話記録の「岩手県紫波郡昔話集」、「岩手県上閉伊郡昔話集」、日本放送出版協会発行の「遠野の昔話」、「羽後の昔話」、角川書店発行の「遠野物語、遠野物語拾遺」、遠野市立博物館発行の「佐々木喜善全集(Ⅰ)」を用いた。

伝説では、角川書店発行の「青森の伝説」、「岩手の伝説」、「秋田の伝説」、みずうみ書房発行の「日本伝説大系第一巻北海道・北東北、第二巻中奥羽」、山田書院発行の「日本の伝説Ⅰ北海道/東北」を用いた。

結 果

青森県で9例、岩手県で31例、秋田県で14例、合計54例収集した。

Ⅰ. 収集した症例の要旨

1. 青森県

<民 話>

- 1) 長者の若旦那が夜中にあかりがついた物置小屋を覗き、きれいな娘がいるのを見て倒れ、原因のわからない病気に取り憑かれた。ご飯もろくに食べなくなった。医者も祈祷師も薬も効果がなかった。占者は恋患いと考え、いつもはきたない婆様の姿をしている娘に給仕をさせた

ところすっかり治った³⁾。

- 2) 父親は盲目で、母親は病気であった。子供が沼から拾ってきた観音様に母親が触れたところ父親の目が開いて見えるようになり、母親の病気も治った。観音様の救いであった³⁾。
- 3) 江戸の殿様が重体となり医者では治せなかった。鳥が噂話をしているのを聞いた子供が占いの真似をし、殿様は病気ではなく、殿様が寝ている床の下に刃を上に向けて落ちている刃物の思いによるためだと言った。刃物を取り除いたら殿様は嘘のように良くなった⁴⁾。

<昔 話>

- 1) お爺さんとお婆さんには子供がなかった。神様に願をかけたところお爺さんの脛から小さい男の子が生まれた⁵⁾。
- 2) 博奕打ちが神様からもらった籠の赤い方で年頃の娘の尻をなでたところ、尻が止まらなくなった。医者も薬も虚無僧も行者も止められなかった。占い師に化けた博奕打ちが籠の白い方で娘の尻を撫でたところ尻は止まり、博奕打ちは娘の婿に収まった⁵⁾。
- 3) 金持ちの家の娘が大病にかかった。カミサマ(巫女)に見てもらったら、屋敷のまわりにある大きな木を伐れば命は助かると言った。木を伐って倒そうとしたが倒れなかった。
あるお爺さんが鴉の言葉が聞ける頭巾を被って聞いたところ、台所の流しの下の中土の中に蛙が難産で苦しんでいるのでそれを助けると娘の命は助かると言った。蛙を助けたところ娘の病気もよくなった⁶⁾。

<伝 説>

- 1) 豪農の娘が病気になった。八甲田山の薦温泉に召使の女たちをつけて養生にやった⁷⁾。
- 2) 八戸の長者の17歳の娘が毎日床の中で暮らす日が多くなった。医者に診てもらったが効き目は現れなかった。占い師は祈祷をすませ、ほろど沼で静養させれば元気になるとお告げがあった。ほろど沼の側に別荘をつくり、下男夫婦をつけて送り出した。山菜を食べさせ、清水を飲ませたところ日毎に元気になった⁷⁾。
- 3) 子供達の頭に毒性のできものができた。山に働きに行っている人が、片方の足を痛めたひ

き蛙が、水が噴き出している窪みで泳いでいるのを見た。その水を汲んできてお湯にして子供達の頭を洗ったところ、二日ほどで乾いて治った⁸⁾。

2. 岩手県

<民話>

- 1) 平安京の天皇は何者かにうなされてお苦しみになった。名のある医者が見つめて介抱し、神主や僧侶が祈願したが効果がなかった。陰陽師の安倍清光が占ったところ、都の東北の方角にある国の松の大木のたたりであると言った。松の大木を探したところ稗貫郡高松の観音山の頂にある大木に違いないということになり、胆沢の城から派遣された若者が切り倒した。天皇のご病気もお治りになった⁹⁾。
- 2) 小夜姫は盲目の母の目を大蛇の目玉でこすったところいつしか開眼した¹⁰⁾。
- 3) 左衛門太郎夫妻には子供がなかった。二戸の浄法寺の本尊、桂清水観世音に祈願し、お堂に七日七夜お籠りをした。七日目満願の夜、観世音が夢枕に立たれ、願いを聞いて子供を一人授けてやると仰せられた。やがて妻は身ごもり女の子が生まれた¹⁰⁾。
- 4) 貧しい夫婦は40の坂を越えたというのに子供がいなかった。お水神さまに願をかけたところ、女房は腹が痛んできた。近所のコナサセ(助産婦)婆に診てもらおうと子供が生まれそうだという。間もなく生まれたのは一つの小さいツブ(田螺)であった¹⁰⁾。
- 5) 長者の金太郎の母親が病気になった。金太郎は毎日水垢離をとっては氏神様に参り、伏し拝んだ。お宮の前にワラシがいて、東の方に水が湧くところがあり、その水を汲んで飲ませればよくなると教えてくれた。母親にその水を飲ませたところ病気は紙を一枚一枚はぐようによくなった¹⁰⁾。
- 6) おみつは大蛇が家の中に入ろうとしたので丸太と大まさかりで大蛇の腸を断ち切った。おみつは気が遠くなって、目がふらふらし、その後病気が重くなっていった。オカミン(巫女)は蛇の代言をし、タタリをなすのだと言った。父の佐助が強く反論したところ、霊が乗り移ったオカミンはわれを祭ってくれよと言って元に

帰った。佐助は小さい社をたてて、蛇の霊を祭った。おみつの病気は紙をはぐようによくなった¹⁰⁾。

- 7) 物は食べないから嫁にしてくれと嘘をついた女房は腹が痛くてうんうんうなりながら寝ていた。夫は女房の腹をさすりながら呪ってやり、腹病みを拝んでやった¹¹⁾。

<昔話>

- 1) 長者のお姫様が大病になった。医者や法者にかかっても治らなかった。すると鼻利きをする男が鼻利きを頼まれた。男は権現様にこもってお姫様の病気を知らせてくださるようにと願をかけた。権現様からは、長者殿の屋根の上に青大将がいて悪気を吐き、根太の下には蝦蟇がいて邪気を出しており、その間にお姫様は寝ているから病気になったので、それらを取って川へ流すとたちどころに治るとのお告げがあった。そうしたところ病気は薄紙をはぐようによくなった¹²⁾。
- 2) 長者の長男は、夜中に明かりがみえる厩の尻からのぞくと、姥皮を脱いできれいな娘がいたので見そめて病気になってしまった。長者は医者、物知りに診てもらったが治らなかった。いだこ(巫女)は恋わずらいだから、思っている女ごに介抱させれば治ると言った。姥皮を被ってかまの火焚き婆様として働いていた娘が薬をすすめたところ食も進み、病気も治った¹²⁾。
- 3) 後妻が大病になったがいかなる医者も治せず薬も効果がなかった。ある物知りが、今年19歳になる女性の生肝を飲めばたちまち治ると言った。先妻の娘は今年19歳になるので、人夫達に娘を奥山に連れて行かせて娘の肝を取らせようとした。そこへ白い犬が走って来て倒れて死んだ。人夫達はこの犬の肝を取って帰り、後妻はその肝を飲んだところ病気は治った¹²⁾。
- 4) 旦那様の娘お花が祭礼から帰ると体の具合が悪いからと言って寝てしまった。医者や山伏に毎日のように診てもらったが治らなかった。観音様が親たちの夢枕に立って、娘の病気は家の中に思う男がいるせいだから、その者と一緒にすればすぐ治ると言われた。かまどの火焚の三八が奥の間に通るとお花は顔を赤くして、病気もすっかり治った¹³⁾。

- 5) 遠野の町の山々に明るい鳥御前という人の連れが谷底で気絶している男を見つけた。家に連れて帰って三日ほど病んで男は死亡した。山伏のケンコウ院に相談したところ、山の神々の遊べる所を邪魔したためその祟りで死亡したと言った¹⁴⁾。
- 6) 長者の一人娘が難産で四苦八苦していた。大勢の医者や法者も手の下しようがなかった。鳥の噂話を聞くことのできたある爺様が、火鉢にカンカン火をおこして、土瓶をかけて、持って行った古暦と縫い針とを入れてぐたぐたに煎じて飲ませた。直ぐに苦しみが取れて、男の子を産み落とした¹⁵⁾。
- 7) 男は泊めてもらった家の旦那様が病気で、三年味噌を食べないとどうしても治らないと言われた。男は自分が持っていた三年味噌をすすめたところ、旦那様は次の朝にはすっかり良くなった¹⁵⁾。
- 8) 法螺吹きは拾った篋の赤い方で長者の娘の尻を撫でたところ、尻が止まらなくなった。医者も法者も何の甲斐もなかった。門前に高札を立てて、この家の一人娘の不思議な病気を治した者には、何でも望み次第という文句を書き付けた。法螺吹きは篋の黒い方で娘の尻を撫でたところピタッと止まった。法螺吹きは長者の聲になった¹⁵⁾。
- 9) 雪姫の母は娘恋しさに目を泣きつぶして盲目になった。雪姫は蛇体であった長者の妻女から御礼としてもらった宝珠で母親の目をこすったところ目が開いた¹⁵⁾。
- 10) 姉弟の母は長の病気で寝ていた。姉は沢の奥に流れていた水を飲むと、例えようもなく甘く、担いでいた重い柴が急に軽くなった。その水を母に毎日飲ませたら病気は一枚一枚紙をはぐようによくなった¹⁵⁾。
- 11) 長者の旦那は片足を蛇に噛みつかれた。足は槌のように腫れあがり、痛い痛いと言き叫んで日夜苦悶した。占い者に化けた狐が卦を立てて、病気を治せる人は、長者の屋敷の牢に入られている旅人で、天下に名高いお医者さまであると。旅人が長者の足を診て薬をつけると、見ている間に傷はよくなった¹⁵⁾。
- 12) 村の童等がオシラ仏の首に縄を結びつけて井戸に投げ込んで遊んでいたので主人が咎めた

- ところ口が曲がってしまった。巫女はオシラ仏が面白く童等と遊んでいたところを邪魔されたので罰をあてられたのだと言った。口開きをしてもらってお詫びをしたところ許された¹⁶⁾。
- 13) 村人が里道の傍にある丸石に腰を掛けると気分が変になり、家に帰って病気になった。巫女はその石はチビキの石であり、チビキとは血引で人の生きた血を石に塗るのだということであった¹⁷⁾。
- 14) 磯草採りに来た娘が黄金浜にあった石に腰を描けたところ、体が石に密着して放れなくなった。巫女に離してもらい、その代わり石を山の上に引き上げて神としてほしいとのことであった¹⁷⁾。
- 15) 長者の娘が長の病気で今日か明日かという容体であった。鳥の噂話を聞いた爺様が八卦を置き、呪文を唱え、長者が土蔵を建てた時、一匹の蛇が釘で板に打ち付けられて苦勞しており、その思いが積もって娘の体に障り病気になったと言った。大工を呼んで蛇を離し、丈夫になってから解放した。娘の病気は日数を経つうちに全快した¹⁸⁾。
- 16) 長者が長年病気にかかっていた。医者や法者に診てもらったがよくなならない。ある爺様が八卦を置いた。呪文を唱えながら、長者が離れ屋敷を建てた時に伐採した楠の木の切り株が死にきれずにおり、その思いが旦那にかかって病気になっているので切り株を掘ってしまえと言った。木の根を掘って庭に飾って木の神様に祭ったところ、旦那の病気は薄紙をはがすように治った¹⁸⁾。
- 17) 長者の娘が病気になっていくら手をつくしてもよくななかった。蜘蛛息子は、向い山の麓の岩の間から湧いている美しい水を汲んできて飲んだりつけたりすると直ぐ治ると言った。長者は人をやって水を汲んできて娘に飲ませたり、つけたりしたらめきめきとよくなった¹⁹⁾。
- 18) 母は手に沢山いぼができた。お宮に何気なく手を触れたところ石のかけらが取れた。そのかけらをお宮にあげて拝んだところ、いぼは皆無くなっていた¹⁹⁾。
- 19) 嫁が難産で苦しんでいた。倉七という正直な木こりは仙人にももらった巻物を出して呪文を唱えたところ、子供は直ぐ生まれた¹⁹⁾。

20) お爺さんと一緒に鉄砲で白い狐を打った人たちは、何日か経ってから口が曲がったり、眼が見えなくなった。和尚さんは、この狐は京都の伏見宮内さんのお使いだから、お稲荷さんにお詫びして許してもらうのがよいと言った。盲目の巫女は、この狐は宇迦の神様の狐だから、お宮を造って祀ってお参りすることだと言った。お宮を造って拝んだところ、口の曲がった人も、眼が見えなくなった人もずんずんよくなった¹⁹⁾。

<伝 説>

- 1) 別当家の老人は、地藏様を縄で引っ張って遊んでいた子供たちを咎めたところ重い病氣にかかった。巫女に占ってもらったところ、地藏さまは子供が好きなのにやめさせた祟りだと言った²⁰⁾。
- 2) 家の主人が牛肉を食べたところ、翌日口が右の方に曲がり食事でもできなくなった。信心深い義兄は、オシラサマのお叱りに違いないと思い、一心に拝みひたすら謝った。すると元に戻った²⁰⁾。
- 3) お米は熊が現れ、気が遠くなっていった。右の足首に激痛を感じた。若者は腰に下げた革袋から合わせ貝を取り出し、つめてある黒い油のようなものを足首に塗ってくれた²⁰⁾。
- 4) 若者は寝具にくるまったまま、苦しげに体を小刻みにふるわせていた。娘は身につけたものを脱ぎ去ると、熱くふるえる体を素肌で抱きしめると、祈るように叫びつづけた。一夜明け、若者のふるえはいつの間にか去り熱は下がった²⁰⁾。

3. 秋田県

<民 話>

- 1) 長者の姉さんが、怠け者の男に観音様からもらった木のしゃもじの黒い方で鼻を撫でられ鼻が天井につかえるほど高くなった。医者、針、あんま、坊様が呼ばれたが治せなかった。八卦置きに化けた怠け者の男は、八卦を置き、まじないを唱えながらしゃもじの赤い方で姉さんの鼻をたたいたところ元通りになった²¹⁾。
- 2) 佐竹義宣公は毎夜悪夢にうなされ、びっしょり汗をかいては目が覚めて後味が悪い思いを強

くした。修験、護持僧の祈祷などを行ったが効果がなかった。武家の法式にのっとりた方法をとって行ったところ、一匹の老狐が現れ築城により住処を失ったので義宣公の夢枕に立って眠りを脅かしたという²²⁾。

- 3) 姑が病の床につくようになった。山伏の南海坊は、神前の米に呪文をかけ、おひねりにして嫁に与え、今日より7日間この米を炒って姑に食べさせれば毒消しになり、祈祷が終わるころにはきっと治るだろうと言った。姑は少しずつ快方に向かい7日後にはすっかりよくなった²³⁾。

- 4) 年老いた母は重い病氣にかかった。母は夢の中で、鶴の生胆を食べれば病氣も治って長生きすると神のお告げを聞いた²³⁾。

<昔 話>

- 1) 長者の息子が恋の病にかかった。長者は心配して八卦に見てもらったところ、相手は火焚き婆をしている娘だということなので、お湯に入れてよい衣裳を着せたら立派な姿になり、息子の病氣は一目見ただけで治った²⁴⁾。
- 2) 長者の娘は尻が止まらなくなった。医者を呼んだり、法華を呼んだりいろいろなことをしたがどうしても止まらない。そこへ怠け者の男が現れて、狐にもらった扇子で娘の尻を撫でたところ尻は止まった²⁴⁾。
- 3) 長者が大病にかかった。鴉の世間話を聞いた怠け者の男が有名な八卦置きだという触れ込みでやってきた。唱え言をして、庭のミズ木を伐って片端から塩水をぶっかけろと言った。皆がその通りやったら長者の大病は治った²⁴⁾。
- 4) 嫁は姑が一寸出た間にまんじゅうを口に入れた。姑が帰ってきて嫁を呼んだが返事がない。台所で目の玉を白黒させて、にわかに唾になった。祈祷師を呼んだところ、嫁のまわりに屏風を立て回し、この間に噛み給え、呑み給えと言った。嫁は安心して呑み下すことができ、唾も治った²⁴⁾。
- 5) 娘の旦那さんは、娘がどんな子を産むのだろう、難産で死ぬのではないかと苦にして大病人になってしまった。占い師は、氏神様のお宝の大杉の頂上にある鷲の巢の卵を、婿がお供を一人つれて取ってきて食べさせると治ると言っ

表 1 病人あるいは悩める人

身分の高い人 天皇、殿様、姫の父母	7 例
富裕層 長者、長者の家族、 旦那、娘	23 例
一般人 老爺、老婆、父、母、娘、子供、 姑、夫、妻、若者、男、 村人、鉄砲うち	29 例

表 3 効果がなかった治療歴

担当者 医者	14 例
僧侶、法者、山伏、 行者、法華、祈祷師、 カミサマ（巫女）、 神主、物知り	16 例
針師、あんま	2 例
方法 薬	3 例

表 2 症状あるいは悩み

病気、大病、重体	23 例
全身的症状 うなされた、 体の具合が悪い、 ふるえ、発熱、 体が石に密着、 恋わずらい	9 例
局所的症状 目が見えない、 口が曲がった、 放屁、難産、足が痛い、 その他	20 例
子供がいない	5 例

表 4 治療担当者あるいは相談者

医者	1 例
宗教等関連者 巫女、占い師、八卦置き、 山伏、祈祷師、陰陽師	17 例
一般人 本人、爺様、若者、男、娘、 夫、妻、義兄、鼻利き男、 物知り、ほら吹き	35 例

た²⁴⁾。

- 6) お爺さんとお婆さんには子供がいなかった。神様に子供が一人ほしいとお願いをした。お爺さんが山へ栗拾いに行ったところ、赤ん坊の泣き声が聞こえ、一つの栗のいがの中で小さな赤ん坊が泣いていた²⁵⁾。
- 7) お爺さんとお婆さんには子供がいなかった。裏のお稲荷さんに子供を授けてくれるようお願いをした。すると、お婆さんの脛が痛くなり、脛が破れて小さな男の子が生まれた²⁵⁾。

<伝 説>

- 1) 富貴姫の父は病気にとりつかれ日毎に弱まっていった。富貴姫は、女が行くことを禁じられていたどんな病気でも治るという霊泉に近づき、泉の主と契りを結んだ。姫は降り積もる雪に埋もれてしまった。春が来ると父の病気は治った²⁶⁾。
- 2) 藩主は原因不明の病気になった。巫女は仙北郡協和町の唐松神社の怒りが及んでいると

占った²⁶⁾。

- 3) 夫は目が見えなくなった。妻は院内の不動尊にお参りした。満願の日に白髪の老人が現れて、霊薬の泉の湧く場所を教えられた。水を汲んでいって夫の目を洗ったところ全治した²⁶⁾。

II. 収集した症例の分析

病人あるいは悩める人を表 1 に示す。身分の高い人に比べ一般人と富裕層が圧倒的に多かった。

症状あるいは悩みを表 2 に示す。局所的症状の中には、「口が曲がった」と口腔外科的症状も含まれていた。

効果がなかった治療歴について表 3 に示す。

担当者では医者と宗教等関連者が大半を占めた。なお一般人で医者の診察を受けた例はなかった。

治療担当者あるいは相談者について表 4 に示

表 5 診断法あるいは本人の願い成就法

占い	6 例
祈祷	6 例
八卦	4 例
霊の乗り移り	1 例
その他	2 例

表 7 治療法

医学的療法	27 例
娘による介抱, 山の湧き水を飲む, 霊泉, 温泉, 静養, 犬や鶴の肝臓を食べる, 鶯の卵を食べる, 腹をさする, その他	
宗教的療法	
観音様に触れる, 呪文	5 例
祟りを除く方法	11 例
蛇の霊を祀る, 狐をお宮に祀る, 楠を木の神様として祀る, オシラサマにお詫びする, その他	

す。病人本人を含む一般人が最も多く、次いで宗教等関連者であった。なお宗教等関連者の中で最も多かったのは巫女で 8 人であった。

診断法あるいは本人の願い成就法について表 5 に示す。医学的方法は見当たらなかった。

病気の原因あるいは病名を表 6 に示す。祟りが最も多くを占めた。

治療法を表 7 に示す。医学的方法が最も多く、次いで宗教的療法であった。

治療効果を表 8 に示す。大半が成功例であった。

考 察

I. 民話、昔話、伝説について

民話は民間に口頭伝承された散文形態の口頭伝承または口承文芸の話の総称とされている²⁷⁾。宮本常一は、民話の概念ははっきりせず、昔話、伝説、世間話のようなものを一応民話と規定しえると思うと記述している。さらに吉沢和夫の文章を

表 6 病気の原因あるいは病名

祟り	13 例
動物	狐, 蛇, 蛙
植物	松, 楠
鉱物	刃物
宗教等関連	地藏様, 山の神, 神社, オシラサマ
邪気	2 例
青大将, 蝦蟇	
医学的	6 例
蛇に咬まれた, 娘恋しさに泣いた, 恋わずらい	
その他	2 例

表 8 治療効果

治癒	38 例
子供の誕生	6 例
死亡	1 例

引用して、民話とは民衆生活の中から生まれ、民衆によって口から口へ伝えられていった民間説話一般を指すものとして理解してよいと思うと述べている²⁸⁾。

昔話は基本的には無文学社会における言語伝承で、伝説、世間話とともに民間に伝えられてきた説話の一類とされている²⁷⁾。宮本は、昔話は雑談ではなく、その冒頭に「昔」という言葉がつき、その話は民衆の生活感情にピッタリするものであり、感覚的に異質なものは受け付けず、武勇談が少なく、語り手は多くの場合農民であると述べている²⁸⁾。そして、宮家準は、昔話は民間の伝承者が生活の中で語り伝えてきた伝承で、冒頭が「ムカシ」という語ではじまる空想的な内容の話をさしていると記述している²⁹⁾。

伝説は、民俗学が対象とする口承文芸の一分類で、一般にはイワレ、イイツタエなどと称され、土地に根差した形で伝承されてきたとされている²⁷⁾。宮本は、伝説では山川鳥虫草木のようなものをはじめ、家、人その他あらゆるものについて話され、農民だけでなく武士も町民もみな語り伝えていと述べている²⁸⁾。さらに宮家は、伝説は、

過去に実際に起こったと信じられている出来事を、具体的な事物と結び付けて説いた物語で、伝承者の間では真実のこととして深く信じられていると記述している²⁹⁾。

したがって、今回収集した病氣治療例はいずれも民衆の生活を反映しているものと考えられる。民話、昔話、伝説として書籍に記載された内容は、いずれも民俗学や歴史学等の研究者が各地域の住民より直接聞き出したものである。しかしながら話の内容が起こった年代については不明である。

II. 病氣治療例について

病人あるいは悩める人では一般人と富裕層が圧倒的に多かった。それは民話、昔話、伝説が民衆生活の中から生まれたものであったことによると考えられる^{27~29)}。

症状あるいは悩みでは「口が曲がった」が3例認められた。これらはいずれも「顔面神経麻痺」と考えられる。

効果がなかった治療歴では、一般人が医者の治療を受けた例はなく、一般人にとって医者が遠い存在であったことが伺える。

医者が対応できなかった理由としては、現代のような診断法や治療法が確立していなかったこと、中でも消毒法、抗菌薬、麻酔法などが確立していなかったことが大きな要因としてあげられる。

治療担当者あるいは相談者では、本人を含む一般人が最も多く、医者は1人であったことから劣悪な医療環境が示された。その中で活躍したのが宗教等関連者であり、そのうち巫女が最も多かった。

神田より子は東北地方の巫女について次のように三種類に分類して解説している。すなわち、巫女は、超自然的な存在と人々の間を媒介する女性の宗教者である。東北地方には以下のような三種類の巫女がいる。第一は、一定の修行期間に師資伝授を受け、神つけの儀式などの入巫儀礼を経たイタコ、イチコ、ワカ、オカミン、オナカマ、ミコなど、地域ごとに名称が異なる盲目の巫女である。彼女らを総称してミコと呼んだり、修行を経験した上で巫女となることから、修行巫とも呼ぶ。第二は、成巫過程において巫病と呼ばれるような心の病や発作を伴う神秘体験を持つ巫女で、地域

ではカミサマ、ゴミソ、カミツケなどと呼ばれ、総称して行者と呼んだり、神の召命によって巫女となることから召命巫とも呼ばれる。第三は、近世期に修験道に所属して、今も神社の祭礼には湯立託宣や神子舞を舞い、病氣治しの儀礼などを行う神子と呼ばれる人々である³⁰⁾。

巫女が活躍した理由としては以下のように考えられる。すなわち、巫女は女性であり、女性の病人にとっては話しやすい相手である。修行をして資格を所有している場合には相談相手として信頼された。盲目の巫女の場合には人一倍苦勞している人であることを病人が認識しているため自分の苦しみを理解してくれる相手と考えた。そして巫女は、病人の話を、共感をもってよく聞き、やさしい言葉と病氣回復を目的とした処置を試みたのではなかろうか。それを病人は藁をも掴むような思いで受け入れたのではないかと想像する。詳細は不明であるが、そのことが、巫女が相談相手として最も多く記述された理由であり、これは現代の心理療法の原点になっているのではないかと考える。

他の宗教等関連者として占い師は、星など天体の運行、天候や植物の状態、鳥獣の行動、夢など神羅万象に兆しを読みとる占いの方法を習得し、個人・集団の悩みの原因を判断し、未来を予見し、行動の指針を与えることを職業とした³¹⁾。

八卦は易占いであり筮竹や算木を使って占う。卦とは算木にあらわれる形象で、それによって天地間の変化をあらわし、吉凶の判断をする。いつからか易者は八卦見と呼ばれるようになり、今回の収集では八卦置きと表現されていた²⁷⁾。

山伏は、修験道の宗教的指導者で修験者、客僧ともいわれ、山野に伏して修行することに因む名称である。山伏が修行した霊山として東北地方では山形県の羽黒山が有名である。彼らは里に定住して祠堂の別当、霊山の先達、加持祈祷、芸能などに従事したことから里山伏、里修験と名づけられた²⁷⁾。

祈祷は神仏などの崇拜対象に祈ることで種々の願いの成就を期する行為であり、祈祷を業とする宗教的職能者を祈祷師と呼んでいる。祈祷師は、神仏、動物などもろもろの霊的存在と交流する特異な能力を持つとみなされ、病氣や災難の原因を判断し対処するための呪法を授けたりする³¹⁾。

陰陽師は六壬式占でさまざまな災害や怪奇現象を占い、天皇や貴族はその占文に従って物忌みを行い、厄難を除く祭祓を修した³¹⁾。

これらの宗教等関連者も医者の治療を受けられなかった病人に対し治療担当者あるいは相談者として活躍したことは評価すべきことと考える。

診断法あるいは本人の願い成就法では、霊の乗り移りが1例あるが、これはオカミン（巫女）による対応例である。この例では病人の父親に依頼されたオカミン（巫女）に蛇の霊が乗り移り、病気の原因と対処法を告げている。

病気の原因あるいは病名では、現在とは異なり、祟り、すなわち超自然的な病因が最も多かった。宮家準によれば、病気の超自然的な原因に関しては、自己に責任があるとするものと、他者に原因が求められるものがある。このうち前者は病気を自己の霊魂・気などのおとろえや、これらの遊離によるとするものである。他者に原因を求めるものは、病気を生霊、死霊、怨霊、地神、荒神、疫神などの障りとするものである。生霊の場合には、社会経済的秩序の混乱に対応できず、瞋恚の念を持った人の生霊が憑依した結果、病気がもたらされている。これに対して神霊の祟りは、人間が超自然的秩序を無視したことに対して神が怒り、罰として祟って災厄をもたらしたと説明している²⁹⁾。そのうちオシラサマは養蚕の神、眼病を治す神、あるいは火伏せの神として拝んでいる家もあり、地域によっては農神や漁神として扱うところもあり、信仰形態は多種多様である³²⁾。今回の結果は、祟りを起こすものには動物、植物、鉱物まで含まれ、当時の人々が祟りに対していかに恐怖を感じていたかを示している。

治療法では、医学的療法、宗教的療法、祟りを除く方法に分類できた。ところで、青森県、岩手県、秋田県の民間療法においては、さまざまな祈願・祈祷・呪いの療法、物理的療法、民間薬療法が報告されている³³⁾。しかしながら、今回収集した例では物理的療法としての温泉を利用した治療が見られたが、針灸の例はなく、さらには民間薬を利用した例も見当たらなかった。

治療効果では成功例の報告がほぼすべてを占めていたが、それは成功例が民話、昔話、伝説に取り上げられたことによる。

ま と め

- 1 青森県、岩手県、秋田県の民話、昔話、伝説に記述された病気治療例を収集し分析した。
 - 2 収集した54例において病人あるいは悩める人では身分の高い人は少なく一般人と富裕層が圧倒的に多かった。
 - 3 症状あるいは悩みでは顔面神経麻痺と考えられる例が3例認められた。
 - 4 効果がなかった治療歴では一般人が医者の治療を受けた例はなかった。
 - 5 治療担当者あるいは相談者では、本人を含む一般人が最も多く、巫女をはじめとした宗教等関連者の活躍が目立った。
 - 6 診断法あるいは本人の願い成就法では、占い、祈願、八卦などが多かった。
 - 7 病気の原因あるいは病名では祟りが最も多かった。
 - 8 治療法では医学的療法に次いで宗教的療法が多かった。
 - 9 治療効果では成功例がほぼすべてを占めた。
- 以上の結果より、現代のような進歩した医療技術が存在せず、医療担当者の数も少なく、健康保険制度も確立していなかった時代において、人々が病気になった際、巫女をはじめとした宗教等関連者が頼りにされ、貢献したことが伺えた。治療効果には心理的要因が大きく関与しており、現代医学の心理療法の原点になっているのではないかと考えられる。

謝 辞

病気治療例の収集にあたりましては、国立国会図書館、国立歴史民俗博物館、東京都立図書館、千葉市図書館にて各種の書籍および雑誌を閲覧させていただきました。心より御礼申し上げます。

文 献

- 1) 新村拓編：日本医療史，吉川弘文館，東京，2006年8月，18-309
- 2) 酒井シヅ：病が語る日本史，講談社，東京，2010年1月，19-325
- 3) 斎藤正編：日本の民話1 津軽篇，未来社，東京，昭和53年9月，179-184，191-192
- 4) 山名健式編：日本の民話第2巻・東北I，研秀出版，東京，1980年，55-56

- 5) 斎藤正編：津軽昔話集，岩崎美術社，東京，1976年4月，23-24，165-169
- 6) 高松敬吉編：下北半島昔話集，岩崎美術社，東京，1984年4月，81-84
- 7) 森山泰太郎・他：青森の伝説，角川書店，東京，1977年12月，25-26，213-220
- 8) 宮田登編：日本伝説大系第一巻北海道・北奥羽，みづうみ書房，東京，昭和60年11月，249-250
- 9) 深沢紅子，他：日本の民話1 岩手篇，未来社，東京，昭和53年9月，429-434
- 10) 及川儀右衛門編：日本の民話別巻，未来社，東京，昭和53年7月，72-78，137-140，153-157，166-167，441-444
- 11) 山名健弑編，日本の民話第2巻東北Ⅰ，研秀出版，東京，1980年，129-130
- 12) 柳田国男編：岩手県紫波郡昔話集，三省堂，東京，昭和48年10月，19-21，60-62，68-70
- 13) 柳田国男編：岩手県上閉伊郡昔話集，三省堂，東京，昭和48年10月，13-17
- 14) 柳田国男：遠野物語，角川書店，東京，平成9年5月，52
- 15) 佐々木喜善：聴耳草子，佐々木喜善全集Ⅰ，遠野市立博物館，遠野，昭和61年6月，359-361，384-386，415-417，437-438，516-517，546
- 16) 佐々木喜善：江刺郡昔話，佐々木喜善全集Ⅰ，遠野市立博物館，遠野，昭和61年6月，75
- 17) 佐々木喜善：東奥異聞，佐々木喜善全集Ⅰ，遠野市立博物館，遠野，昭和61年6月，227-229，229-230
- 18) 佐々木喜善：老嫗夜譚，佐々木喜善全集Ⅰ，遠野市立博物館，遠野，昭和61年6月，275-277，277-278
- 19) 遠野民話同好会編：遠野の昔話，日本放送出版協会，東京，昭和50年11月，33-36，118-119，121-122，161-163
- 20) 金野静一，他：岩手の伝説，角川書店，東京，昭和55年1月，80-81，84-85，158-169，218-229
- 21) 瀬川拓男，他編：日本の民話2 秋田篇，未来社，東京，昭和53年9月，12-16
- 22) 及川儀右衛門編：日本の民話別巻，未来社，東京，昭和53年7月，424-425
- 23) 山名健弑編：日本の民話第2巻・東北Ⅰ，研秀出版，東京，1980年，76-77，78-79
- 24) 武藤鉄城編：角館昔話集，岩崎美術社，東京，1976年5月，96-98，107-108，149-151，165，227-228
- 25) 今村泰子編：羽後の昔話，日本放送出版協会，東京，昭和52年11月，125-128，159-163
- 26) 野添憲治，他：秋田の伝説，角川書店，東京，昭和52年1月，13-14，52，77
- 27) 福田アジオ，他編：日本民俗大辞典下，吉川弘文館，東京，2000年4月，656，659-660，167，372，749
- 28) 宮本常一：庶民の発見，講談社，東京，2005年12月，252-259，230-232，232-233
- 29) 宮家 準：日本の民俗宗教，講談社，東京，2006年10月，149-150，150-160，249-252
- 30) 神田より子：東北地方における巫女の祈祷と儀礼，歴博，146巻，6-9，2008
- 31) 福田アジオ，他編：日本民俗大辞典上，吉川弘文館，東京，1999年10月，188-189，471，298-299
- 32) 加藤 敬：イタコとオシラサマ，学習研究社，東京，平成15年6月，120-122
- 33) 三浦栄治，他：北海道・東北の民間療法，明玄書房，東京，昭和52年1月，63-101，103-136，173-200

著者への連絡先：鈴木長明
 千葉市美浜区高洲1-14-7-105
 TEL：043-278-3367